

## 報告

# (仮称) シャプラニール・ボランティア有志の会 「原発と私たちを考える勉強会」の活動

東宏乃 (会員、地域連絡会むさしの代表)

## 1. はじめに

### 「原発と私たちを考える勉強会」の発足

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、福島第一原発の事故を含め、日本列島に大きな爪痕を残した。シャプラニールは、福島県いわき市で被災地支援を行ってきているが、原発事故に見舞われた福島での支援は、当然、原発にどう向き合うのかの議論を抜きには語れないと、私は考える。

#### 原発について知らなすぎる私たち

私たちは「原発」について、その科学技術から政治まで、あまりにも知らなすぎる。福島の被災地では、原発についての話題はタブーというか、率直に意見交換ができない状況とも聞く。福島の浜通りと中通りには原発関連の仕事をする住民が数千人居る一方で、放射能被曝を恐れ、小さい子どもを持つ福島の母親たちは、県外に避難せざるを得ない状況に見舞われている。

#### 私たちの問題としての3・11と原発

福島の原発の問題は、福島の原発の電気を使っている「私たち」の問題でもあり、さらにエネルギー政策で原子力を推進してきた政府をもつのは私たち自身であるという自戒も含めて、ボランティア活動の名称を、「原発と私たちの勉強会」とした。そして、勉強を重ねる過程で、何らかの広がりが見えてほしいという願いのもと、団体名はあえて「仮称」のままに活動を出発させた。以下は、その「勉強会」の、過去4回の活動の報告である。この報告を読んで、ご意見をいただいたり、一緒に参加してみたいという会員やその友人が現れたりすれば、大変うれしく思う。

## 2. 第1回勉強会

### 「原発！ほんまかいな？」と意見交換

「原発と私たちを考える勉強会」(以下、「勉強会」)第1回は、2011年10月15日(土)、アジア太平洋資料センター(PARC)制作のDVD「原発！ほんまかいな？」を上映し、意見交換を行った。

何より、原発について、まず知りたい、学びたいというのが、第1回の勉強会の目的であった。ビデオの概要は、「福島第一原発事故から半年——。ウラン鉱山開発から核燃料サイクル、放射線の影響、原発労働、事故の影響まで、いま原発を考えるための情報が満

載！“推進の理由”に、専門家とともに徹底的にツッコミをいれる“原発”ドラマ」である(注1)。

参加者は、20代の会社員から60代の大学講師に加え、なんと被災地・福島から駆けつけてくれた方まで、多彩な14名であった。

#### 福島の経験を二度と他ではさせたくない

参加者14人のうち、2人が原発の是非を問う国民投票の運動に関わっており、意見交換会の中でも、その重要性を訴えていた。また、被災した方からは被災したからこそきっぱりと言い切れるご意見「福島の経験を二度と他ではさせたくない！」と発言し、出会いとは、人を力づけるものだと感じ入った。

#### 参加者の感想

- ・お金より命を大事にしたい。
- ・原発を是とするか否か「国民投票」にかけるべきではないか。
- ・原発という巨大技術は人間の手に余る技術ではないか。
- ・福島の経験を二度と他ではさせたくない。
- ・福島を自然エネルギーで復活させ、それを世界に発信していくべき。
- ・自然エネルギーを導入するために、カッコいいリーダーが出てほしい。

## 3. 第2回勉強会

### 「ワークショップ—テクノロジーと私たち」

第2回目の勉強会(2011年11月19日)は、参加者が8名と多くはなかったが、原子力工学を専攻している大学院生や、パソコンのメーカーで働いている女性、化学を専門とする元大学教員、体験学習の専門家、国際協力NGOの職員など、またもや多彩な顔ぶれが参加した。第1回目の勉強会では原発の問題点に焦点をあてて詳しく学んだのだが、第2回目の勉強会では、原発を科学技術のひとつとして改めて考えてみたかったのである。そのため、「テクノロジーと私たち」というテーマで、『グローバル・クラスルーム』第9章(注2)をもとに、2つのワークショップを行った。

#### 原子爆弾はNoでも原子力発電は容認か

1つ目は、20のテクノロジーを取り上げ、A「規制も制約もなく自由に使ってもいいと思う技術」 B「規

制や制約を設ければ使っていいと思う技術」C「一切使ってはいけないと思う技術」の3つに分類しながら議論した。たとえば、大量殺戮兵器である原子爆弾と無差別殺傷兵器である地雷は、一切使ってはいけないCの山に入るとすぐ合意できた。しかし、原子力発電については、Bに入れるかCに入れるか、長い議論になった。自動車をBに入れるなら、原発もBに入ると主張する人がいたり、反対に、原発は、原子爆弾と同じ原理を使っていて、しかも事故を起こしたのであるから、Cに入ると思うと主張する人がいたり、意見は分かれた。ここでは、原発の科学技術面だけでは語れない難しい面が表面化したといつてよい。倫理的に原発を認められない人が多くいる一方で、原発も1つの技術としてコントロールできると考える人々に分かれ、全体で合意できなかった。

#### 原発推進のCMに慣らされていた私たち

2つ目のワークショップは、著名人が出演する関西電力の原発推進CMを見て、6つの観点から議論した。6つの観点とは、1. 価値観・思い込み、2. 目的、3. 恩恵を受ける人・損失をこうむる人、4. 影響・結果、5. 賛成する理由、6. 反対する理由である。

このCMの提供者は何を狙っているのか、何を思い込んでいるのかで、原発は二酸化炭素を出さないクリーンなエネルギーであるとCMでは主張しているが、原発の建設や核ゴミの処理に沢山の二酸化炭素が排出されるので、クリーンさは思い込みにすぎないと理解できた。その後、原発に賛成している人の観点や反対している人の観点到立つなどして、CMについて多角的に整理したところ、原発について客観的に見直すことができた。今後の「勉強会」では、自然エネルギーについても、このような6つの観点から整理してみたいという意見が自然と湧き上った。

テクノロジーという大枠で原発を捉え直すことで、原発を感情論ではなく論理的に理解できるようになったし、多面的に考察することが重要だと気づいた。ワークショップという手法による学びの成果を得たとも言える。

#### 参加者の感想

・さまざまな職業、様々な世代の人が集まり、意見を出し合う機会は、普段中々ないので、とても有意義で貴重な時間を過ごすことができました。ワーク

ショップを通して、原発についてわからなかったこと、疑問に思っていたことを整理することができました。

- ・どんなテクノロジーも、「リスクとベネフィット」のバランス次第と想っていたが、「責任」の在り方や意味について、新たに考えさせられた。
- ・1つめの作業では、さまざまなテクノロジーを導入するときに必要な条件や制約について考えることで、なぜ、原発はダメだと考えるのか、より論理的に説明できるようになった。2つめの作業では、原発を推進したい企業、恩恵を受ける人、被害を受ける人、賛成・反対の理由など、多面的に考えることで、頭の中が整理された。
- ・ほとんどの技術が「規制や制約を設ければ使ってもよい」に分類されたのを見て、テクノロジーは一般的に使い方次第で良くも悪くもなるのだと改めて思った。
- ・テクノロジーの問題を考えていくと、経済・社会・政治との関係で論じるべき観点がたくさん出てきて考えさせられた。次回は、自然エネルギーの可能性について討議してみたい。

#### 4. 第3回勉強会

##### 「震災の現場に立って～福島と東京の間で感じた距離～シャプラニールの職員・内山智子さんと考える」

勉強会の第3回目は、「Listen いわき」(注3)との共同企画として、2011年12月10日(土)、福島県いわき市での緊急救援および復興支援に携った職員・内山智子さん(当時)から、震災直後の様子から今までの状況・課題をお聞きしました。私たちはどんな立場で復興に関わったらいいのかを考え、そして、何より福島の人々は原発をどう思っているのか、間接的にでも知りたかったのである。

20代～60代の12人の参加者は、「マスメディアでは伝わって来ない話を聞きたい」「いわきの人々の生の声と、特に原発をどう思っているのか、お聞きしたい」「東京に居る私たちにできることを知りたい」などを期待していた。首都圏に住む私たちにとって、被災地の話をじっくりと聴く良い機会となった。

娘は将来結婚できなくなってしまう。

「(福島出身の自分の)娘は将来結婚できなくなってしまう」と、小学校5年生の女の子をもつ父親が静かな怒

りとともにつぶやいた、と内山さんは話し始めた。そして、原発の事故の直後、主として首都圏に避難したいわきナンバーの車は、駐車している間に、車体に傷を付けられるなど、様々な嫌がらせにあったそうだ。福島第一原発の電気を使っていたのは、他ならぬ首都圏の私たちだったにもかかわらず、である。一種の差別だ。このような心の狭い人たち、想像力の乏しい市民の存在に、私たちの気持ちは暗くなった。

#### 「福島」と「フクシマ」

また、いつの頃からか、福島は「フクシマ」と呼ばれるようになっていた。原爆投下を受けたヒロシマ・ナガサキにつながる、被曝地としての世界の「フクシマ」。逆に、「福島イコール原発事故」となり、地震や津波の被害者は忘れ去られる存在となってしまったと、内山さんは訴えた。そして、「フクシマ」と書かれた側の気持ちはどうだろうか？ 先の小学校5年生の娘さんを持つ父親の気持ちを考えれば、容易に想像はつく。そして、「福島」が「フクシマ」と呼ばれてしまう、その差別や責任の構造を明らかにする必要がある。わかっているのは、福島の人々は震災と原発事故と二重の被害者なのだという事と、被曝した福島の風土は完全には元にもどらないということだ。

#### 被災者は 100 人 100 色—その声を聴く

シャプラニールは、2011年5月から2011年8月にかけて被災したお宅950軒に調理セットを配給しながら、お話を伺う活動を行ってきた。傾聴する中で、被災した方々の次のような気持ちがわかってきた。

一人ひとりの声はさまざまで、「(避難区域にある自宅に) 戻れるのか戻れないのか、誰か、判断してほしい」といった訴えは特に切実だ。政府が全く機能してない現れでもある。県外の方々の中には、「福島の人は何で逃げないで、そこに留まっているのか？」と、不思議がる方もいるそうだが、被災者それぞれの事情を聴くと、やむに止まれぬ状況の中、福島に残ると決断した方々が多い、とのことだった。仕事、住居、補償の問題など、事情は複雑なのだと推察できる。テレビでも、老夫婦を残して、小さい子どもの居る若夫婦だけが県外に出る家庭が少なからずあると報じられており、家庭内の分裂はそここで起きていることは問題のひとつである。

#### 聴き続け、話しあうことの大事さ

シャプラニールは、2011年10月9日から被災者のための交流スペース「ぶらっと」を開設している。内山さんは「この『ぶらっと』で、編み物をしながらでも、折り紙をしながらでも、少しでも気持ちを通わせながら、被災した方々が情報交換をしたり、お互いの元気な様子を知り合ったりできるようになるでしょう」と述べた。被災地では、何と言っても、心のリハビリと情報ネットワークが必要なのだ。

内山さんは最後に、「聴」という文字を掲げ、福島の人々の声に耳を傾けていくことの大事さを訴えた。また、参加者の一人は、(被災の) 現場に行った人と行っていない人との(感じ方や経験の) ギャップは大きいので、それを埋める話し合いが必要だと、発言した。その思いは、2012年2月の「Feel いわき」に引き継がれた。

#### 参加者の感想

- ・(被災者) それぞれの背景を尊重することの大切さ。
- ・普段より大切にしていきたい近所の人とのつながり。シヨミティ (バングラデシュの相互扶助グループ) の大事さ。地域リーダーの存在と話し合えることの重要性。継続していくこと。
- ・今日の内山さんの話の中に、「本来は、行政がやることなのですけど…」という言葉が何回も出たので、行政の役割について考えさせられた。
- ・さまざまな人のさまざまな生活があることが印象深かった。
- ・内山さんの話で今日は「継続」と「想像力」の重要性が強く喚起されたと思う。
- ・(政治的なことも含め) 自分の想いを発信していける人を周りに増やして行きたい。言えないのではなく、言えるようにしていく。
- ・「まだまだこれから先は長い」と重苦しく感じた。
- ・福島の人と言っても、実はさまざまな人がいることがわかった。マスメディアの情報で知って終わりにしていた自分がいたということを感じた。

## 5. 第4回勉強会

### 「自然エネルギーの可能性と課題」

第4回の「勉強会」は2012年3月10日(土)に、地域連絡会むさしのと共催で特定非営利活動法人環境エネルギー政策研究所 (ISEP) の主席研究員・松原直直さんを招き、標題の講演をお願いした。このテーマ

を選んだのは、第3回勉強会「テクノロジーと私たち」で、自然エネルギーの可能性を知りたいという声があったからであるし、原発に代わる手段を知っておく必要を考えたからである。参加者は21人と多く、講演に先立って上映した「原発!ほんまかいな?」には9人が参加した。

「自然エネルギーの可能性」は、同時に課題でもある。自然エネルギーを100%実現するには、市民が周りの人に話し、議員に話し、現状を変えていくことが必要だと、松原さんは言及した。また、ISEPの政策の大方針である、目標を決めてそれに向かって進めていくこと(バックキャスト)が重要だ、と強調した。具体的には、原発をできるだけ早くゼロにし、2050年までに自然エネルギーを100%にするという目標設定なのだが、そのバックキャストを可能にする仕組づくりには多くの課題があることがわかった。活発な質疑応答が行われたので、以下にその一部を紹介する。

質問：本当に原子力なしでやっていけるのか。

回答：短期的には火力で補うが、昨年化石燃料消費はそれほど増えなかった。省エネ節電効果が大きかった。今後は、各家庭よりも電力を大量に消費する産業分野の対策が必要。企業も国民の安全安心のための社会貢献の意識も持って節電に対処すべき。

質問：原発が雇用を生んでいる側面もあるが。

回答：原発による雇用は一時的なもの。自然エネルギーのほうが、継続的な雇用創出の可能性が高い。また、それは地域性があるためその地域にどんな代替雇用があるか個別に考える必要がある。

質問：個人、企業を含む1億3,000万人がどういう暮らしをしたら自然エネルギーでの自立社会が可能になるのかのビジョンが必要では。

回答：産業構造を変える必要がある。雇用にもかかわり、抵抗はもちろんあるだろうが、エネルギーのあり方が変わると産業も換わらざるを得ない面もある。政府の委員会では、なかなか産業構造の転換まで議論ができないという限界もある。

質問：自然エネルギー100%シナリオについて、インフラ整備にかかるエネルギーは計算に含まれているのか。石油価格は下がると代替エネルギーのニーズ、開

発意欲が下がり、価格が上がると、設備投資のコストが上がり採算が合わなくなるのでは。

回答：2012年7月から始まる固定買取価格制度には、調整幅を持たせているのでそれである程度は吸収する。太陽光については長期的には回収可能な想定である。

質問：自然エネルギーについて市民にできることは何か。

回答：自然エネルギーについて知る機会を増やし、それを伝えること。また、自然エネルギーを使う機会を増やし、自然エネルギーを使っている企業の商品を買って応援するなど。それには情報開示を進める必要がある。たとえば、太陽光発電など、自然エネルギーを使用することでサーチャージ(追加負担)が増えることも考えられるが、それだけ普及しているということで、消費者も高いなりの理由を理解し応援してほしい。

松原さんは質疑に答えながら、自然エネルギーの施設を実際に見に行ってもらいたいとも言われ、私たちの勉強会の第5回目は、2012年7月14日(土)に、「食」と「エネルギー」を自給自足しているパイオニア、埼玉県小川町にある霜里農場の見学へと発展した。

参加者の感想

- ・自然エネルギーについて考える大変よい機会になりました。
- ・化石燃料の今後についてよく理解できた。
- ・持続可能なエネルギー政策を詳しく聞きたかった。
- ・これまでのエネルギーの問題点やこれからとつてもピンチだよ、ということが知れていい機会になりました。
- ・経済と自然エネルギーに関わるプレゼンも聞きたかった。
- ・内容が政策面に偏っており、自然エネルギー導入による生活、産業、経済の変化についてほとんど触られていない。自然エネルギーの供給安定性についても疑問。

## 6. 勉強会の今後 「選びとる未来」

第3回の勉強会で、「東京にいる私たちに何かでき

ますか」という女性の参加者の発言が、私はとても印象に残っている。「原発と私たち」というテーマで、彼女は他ならぬ当事者になったのだといえる。彼女は今後自ら考え、よりよい未来のために暮らしを選んでいくだろう。そういう人が増えて欲しいと思う。そして、2012年3月10日の第4回「勉強会」で、バックキャストイングを提唱した松原さんの資料の最後に、「未来は予測するものではない。選びとるものである」(ヨアン・ノルゴー)とあり、私はその言葉に大きな力を得た。

これまで勉強会はなんとか続いてきた。世間では首相官邸前大飯原発再稼働抗議行動(毎週金曜日夜)や「さよなら原発10万人集会」など、「あじさい革命」が起こっている。私もその一部に参加したが、普通の市民が自発的に参加している様子が印象的であり、希望を感じた。そして、シャプラニールの2つの地域連絡会では、DVD「原発!ほんまかいな?」を観る企画案もあり、この勉強会もこの大きなうねりからみながら続けていければと願っている。

---

## 注

- 1: 「原発!ほんまかいな?」の詳細については、特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター(PARC)のウェブサイト参照。
- 2: デイビット・セルビー&グラハム・パイク著、明石書店、2007年
- 3: 詳細は、「Listenいわき」&「Feelいわき」のウェブページを参照。  
<http://www.shaplancer.org/listen/index.html>

---

## 筆者プロフィール

**東宏乃** 1997年より会員。2001年のスタディツアーを機に、 Bangladesh の農村生活を紹介する教材「ソフィアさんちの家族マップ」をチームで作成。大学教育での担当は体験学習論とフィールドワーク論。ウェブサイト：<http://be-winds.jp/>